

# かんかん虫

有島武郎

青空文庫



ドウニパー湾の水は、照り続く八月の熱で煮え立つて、総ての濁った複色の彩いろは影を潜め、モネーの画に見る様な、強烈な単色ばかりが、海と空と船と人とを、めまぐるしい迄にあざやかに染めて、其の総てを真夏の光が、押し包む様に射して居る。丁度昼弁当時に太陽は最頂、物の影が煎りつく様に小さく濃く、それを見てすらぎらぎらと眼が痛む程の暑さであつた。

私は弁当を仕舞つてから、荷船オデッサ丸の舷にぴったりと繋つてある大運搬船おわたるまの舷に、一人の仲間と竝んで、海に向つて坐つて居た。仲間と云おうか親分と云おうか、兎に角私が一週間前此処に来てからの知合いである。彼の名はヤコフ・イリイツチと云つて、身体の出来が人竝外れて大きい、容貌は謂わばカザン寺院の縁日で売る火難盗賊除けのペテロの画像見た様で、太い眉の下に上瞼の一直線になつた大きな眼が二つ。それに挟まれて、不規則な小亜細亚特有な鋭からぬ鼻。大きな稍々しまりのない口の周囲には、小児の産毛の様な髯が生い茂つて居る。下の大きな、顴骨の高い、耳と額との勝れて小さい、瞥えて見れば、古道具屋の店頭の様な感じのする、調和の外ずれた面構えであるが、それが不思議にも一種の吸引力を持つて居る。

丁度私が其の不調和なヤコフ・イリイツチの面構えから眼を外らして、手近な海を見下しながら、草の緑の水が徐ろに高くなり低くなり、黒ペンキの半分剥げた吃水を嘗めて、ちやぶりちやぶりとやるのが、何かエジプト人でも奏で相な、階律リズムの単調な音楽を聞く様だと思つて居ると、

睡いのか。

とヤコフ・イリイツチが呼びかけたので、顔を上げる調子に見交わした。彼に見られる度に、私は反抗心が刺戟される様な、それで居て如何にも抵抗の出来ない様な、一種の圧迫を感じて、厭な気になるが、其の眼には確かに強く人を牽きつける力を籠めて居る。

「豹の眼だ」と此の時も思つたのである。

私が向き直ると、ヤコフ・イリイツチは一寸苦がい顔をして、汗ばんだだぶだぶな印度藍のズボンはじを摘まんで、膝頭を撥きながら、突然こう云い出した。

おい、船の胴腹にたかつて、かんかんと敲くからかんかんですよ、それは解げせる、それは解げせるがかんかん虫、虫たあ何んだ……出来損なつたつて人間様は人間様だろう、人面白くも無えけちをつけやがつて。

而して又連絡とてつもなく、

お前つちは字を読むだろう。

と云つて私の返事には頓着なく、

ふむ読む、明盲の眼じや無えと思つた。乙う小ましやつくれてけつからあ。

何をして居た、旧来<sup>もと</sup>は。

と嚴重な調子で開き直つて来た。私は、ヴォルガ河で船乗りの生活をして、其の間に字を読む事を覚えた事や、カザンで麵<sup>パン</sup>焼の弟子になつて、主人と喧嘩をして、其の細君にひどい復讐をして、とうとう此処まで落ち延びた次第を包まず物語つた。ヤコフ・イリイツチの前では、彼に關した事でない限り、何もかも打明ける方が得策だと云う心持を起させられたからだ。彼は始めの中こそ一寸熱心に聴いて居たが、忽ちうるさ相な顔で、私の口の開いたり閉じたりするのを眺めて、仕舞には我慢がしきれな相に、私の言葉を奪つてこう云つた。

探偵でせえ無けりやそれで好いんだ、馬鹿正直。

而して暫くしてから、

だが虫かも知れ無え。こう見ねえ、斯うやつて這いずつて居る蠅を見て居ると、己れつちよりや些度計り甘めえ汁を嘗めているらしいや。暑さにもめげずにびんびんしたものだ。

黒茶にレモン一片入れて飲め無えじや、人間って名は附けられ無えかも知れ無えや。

昨夕もよ、空腹を抱えて 対岸むこうぎしのアレシキに行つて見るとダビドカの野郎に遇つた。

懐をあたるとあるから貸せと云つたら渋つてけつかる。いまましい、腕づくでもぎ取つてくれようとする。「才才神様泥棒が」つて、殉教者の様な真似をしやあがる。擦つた揉んだの最中に巡的だ、四角四面な面あしやがつて「貴様は何んだ」と放言はなげくから「虫」だと言つてくれたのよ。

え、どうだ、すると貴様は虫で無えと云う御談義だ。あの手合はあんな事さえ云つてりや、飯が食えて行くんだと見えらあ。物の小半時も聞かされちや、噛み殺して居た欠伸の御葬おむすびいが鼻の孔から続け様に出やがらあな。業腹だから斯う云つてくれた——待てよ斯う云つたんだ。

「旦那、お前さん手合は余り虫が宜過ぎまさあ。日頃は虫あつかいに、碌々食うものも食わせ無えで置いて、そんならつて虫の様に立廻れば矢張り人間だと仰しやる。己れつちらの境涯では、四辻に突つ立つて、警部が来ると手を挙げたり、娘が通ると尻を横目で睨んだりして、一日三界お目出度い顔をしてござる様な、そんな呑気な真似は出来ません。赤眼のシムソンの様に、がむしやに働いて食う外は無え。偶にや少し位荒つぽく働いたつて、

そりや仕方が無えや、そうでしょう」てつてやると、旦那の野郎が真赤になつて怒り出しかつた。もう口じやまどろつこしい、眼の廻る様な奴を鼻梁にがんとくれて逃かすんだのよ。何もさ、そう怒るがものは無えんだ。巡的だつてあの大きな凶体じや、飯もうんと食うだろうし、女もほしかろう。「お前もか。己れもやつぱりお前と同じ先祖はアダムだよ」とか何とか云つて見る。己れだつて粗忽な真似はし無えで、兄弟とか相棒とか云つて、皮のひんむける位えにや手でも握つて、祝福の一つ二つはやつてやる所だつたんだ。誓言そうして見せるんだつた。それをお前帽子に喰着けた金ぴかの手前、芝居をしやがつて……え、芝居をしやがつたんだ。己れにや芝居つてやつが妙に打て無え。

氣心でかヤコフ・イリイツチの声がふと淋しくなつたと思つたので、振向いて見ると彼は正面を向いて居た。波の反射が陽炎の様にてらてらと顔から半白の頭を嘗めるので、うるさ相に眼をかすめながら、向うの白く光つた人造石の石垣に囲まれたセミオン会社の船ド渠ツクを見やつて居る。自分も彼の視線を辿つた。近くでは、日の黄を交えて草緑なのが、遠く見透すと、印度藍を濃く一刷毛横になすつた様な海の色で、それ丈けを引き放したら、寒い感じを起すにちがいないのが、堪え切れぬ程暑く思える。殊にケルソン市の岸に立ち竝んだ例のセミオン船渠ドックや、其の外雑多な工場のこちたい赤青白等の色と、眩るしい対照

を為して、突つ立つた煙突から、白い細い煙が喘ぐ様に真青な空に昇るのを見て居ると、遠くが霞んで居るのか、眼が霞み始めたのかわからなくなる。

ヤコフ・イリイチはそうしたままで暫く黙つて居たが、内部からの或る力の圧迫にでも促された様に、急に「うん、そうだ」と独言を云つて、又其の奇怪な流暢な口辞を振り始めた。

処が世の中は芝居で固めてあるんだ。右の手で金を出すと、屹度左の手は物を盗くすねて居やあがる。両手で金を出すとえ奴は居無え、両手で物を盗ねる奴も居無えや。余つ程こんがらかつて出来て居やあがる。神様つて獣は——獣だろうじや無えか。人じゃ無えつて云うんだから、まさか己れつち見てえな虫でもあるめえ、全くだ。

何、此の間スタニスラフの尼寺から二人尼つちよが来たんだ。野郎が有難い事を云つたつてかんかん虫手合いは軒をかくばかりで全からっきし然たし補足たしになら無えつてんで、工場長開けた事を思いつきやがった、女ならよかろうてんだとよ。

二人来やがった。例の御説教だ集まれてんで、三号の倉庫に狼が羊の檻の中に逐い込まれた様だった。其の中に小羊が二匹来やがった。一人は金縁の眼鏡が鼻の上で光らあ。狼の野郎共は何んの事はねえ、舌なめずりをして喉をぐびつかせたのよ。其の一人が、神様

は獣だ……何ね、獣だとは云わ無えさ、云わ無えが人じゃ無えと云ったんだ。

其の神様つてえのが人間を創つて魂を入れたとある。魂があつて見れば善と悪とは……何んとか云つた、善と悪とは……何んとかだとよ。そうして見ると善はするがいいし、悪はしちやなら無え。それが出来なけりや、此の娑婆に生れて来て居ても、人間じゃ無えと云うんだ。

お前つちは字を読むからには判るだろう。人間で善をして居る奴があるかい。馬鹿野郎、ばちあたり。旨い汁を嘗めつこをして居やがつて、食い余しを取つとき物の様に、お次ぎへお次ぎへと廻して居りや、それで人間かい。畢竟芝居上手が人間で、己れっち見たいな不器用者は虫なんだ。

見ねえ、死くたばつて仕舞やがつた。

何処から枯れた小枝が漂つて、自分等の足許に來たのをヤコフ・イリイツチは話しながら、私は聞きながら共に眺めて、其の上に居る一匹の甲虫に眼をつけて居たのであつたが、舷に当る波が折れ返る調子に、くるりとさらつたので、彼が云う様に憐れな甲虫は水に陥つて、油をかけた緑玉の様な雙の翊むしやうを無むしやう上に振り動かしながら、絶大な海の力に対して、余り悲惨な抵抗を試みて居るのであつた。

私は依然波の間に点を為して見ゆる其の甲虫を、悲惨な思いをして眺めている。ヤコフ・イリイツチは忘れた様に船渠ドックの方を見遣つて居る。

話柄が途切れて閑しんとすると、暑さが身に沁みて、かんかん日のあたる胴の間に、折り重なつていぎたなく寝そべつた労働者の軀が聞こえた。

ヤコフ・イリイツチは徐ろに後ろを向いて、眠れる一群に眼をやると、振り返つて私をでしゃくつた。

見ろい、イフヒムの奴を。知ってるか、「癩癩玉」つてんだ綽名が——知ってるか彼奴を。

さすがに声が小さくなる。

イフヒムと云うのはコンスタンチノープルから輸入する巻煙草の大箱を積み重ねた蔭に他の労働者から少し離れて、上向きに寝て居る小男であつた。何しろケルソン市だけでも五百人から居る所謂かんかん虫の事であるから、縦令市の隅から隅へと漂泊して歩いた私でも、一週間では彼等の五分の一も親交ちかづきにはなつて居なかつたが、独りイフヒムは妙に私の注意を聳やかした一人であつた。唯一様の色彩と動作との中にうようよと甲板の掃除をして居る時でも、船艙の板囲いにずらつと列んで、尻について休んで居る時でも、イフ

ヒムの姿だけは、一団の労働者から浮き上った様に、際立って見えた。ぎりつと私を見据えて居るものがあると思つて振り向くと、屹度イフヒムの大きな夢でも見て居る様な眼にぶつかつたものである。あの眼ならショパンの顔に着けても似合うだろうと、そう思った事もある。然しまだ一遍も言葉を交えた事がない。私は其の旨を答えようとするとヤコフ・イリイツチは例の頓着なく話頭を進めて居る。

かんかん虫手合いで恐がられが己れでよ、太腐れふてが彼奴だ。

彼奴も字は読ま無えがね。

あの野郎が二三年以来カチャと訳があつたのを知つて居た。知つては居たがそれが何うなるものかお前、イフヒムは見た通りの裸一貫だろう。何一つ腕に覚えがあるじゃなし、人の隙を窺つて、鉤の先で船室ケレン小盗そうぢでもするのが関の山だ。何うなるものか。女つて獣は栄耀榮華で暮そうと云う外には、何一つ慾の無え獣だ。成程一とわたりは男選みもしようし、氣前惚れもしようさ。だがそれも金があつて飯が食えて、べらつとしたものでもひつかけられた上の話だ。真つ裸にして日干し上げて見ろ、女が一等先きに目を着けるのは、氣前でもなけりや、男振りでも無え、金だ。何うも女つてものは老としより者の再うまれかわり生だぜ。若死したものが生れ代ると男になつて、老耄が生れ代ると業で女になるんだ。あり相で居

て、色氣と決おもいきり断からつきしは全然無しよ、あるものは慾氣ばかりだ。私は思わずほほ笑ませられた。ヤコフ・イリイツチを見ると彼は大真面目である。

又親つてものがお前不思議だつてえのは、娘を持つと矢つ張りそんな気にならあ。己れにした処がまあカチャには何よりべらべらしたものを着せて、頬つぺたの肉が好い色になるものでも食わせて、通りすがりの奴等が何処の御新造だろう位の事を云つて振り向く様にしてくれりや、宿六はちつとやそつとへし曲つて居ても構わ無えと思う様になるんだ。

それでもイフヒムとカチャが水入らずになれ合つて居た間は、己れだつて口を出すながらも無え、黙つて居たのよ。すると不図ふいと娘の奴が妙に鬱ふさぎ出しやがった。鬱ふさぐもおかしい、そう仰山なんじや無えが、何かこう頭の中で円い玉でもぐるぐる廻して見て居る様な面付をして居やあがる。変だなと思つてる中に、一週間もすると、奴の身の周りが追々綺麗になるんだ。晩飯でも食つて出懸ける所を見ると、お前、頭にお前、造花なんぞ挿して居やあがる。何処からか指輪が来ると云うあんばいで、仕事も休みがちで遊びまわるんだ。偶にや大層も無え。お袋に土産なんぞ持つて来やあがる。イフヒムといがみ合つた様な噂もちよくちよく聞くから、貢ぐのは野郎じや無くつて、これはつきり外に出来たなどそう思つたんだ。そんなあんばいで半年も経つた頃、藪から棒に会計のグリゴリー・ペトニコ

フが人を入れて、カチヤを囲いたい、話に乗ってくれと斯うだ。

之れで読めた、読めは読めたが、思わく違いに当惑まごついた。全くまごつくじや無えか。

虫の娘を人間が欲しいと云つて来やがったんだ。

じりじりと板挟みにする様に照り付けて居た暑さがひるみそめて、何処を逃れて来たのか、涼しい風がシャツの汗ばんだ処々を撫でて通つた。

其の晩だ、寝ずに考えたつてえのは。

己れが考えたなんちや可笑しかろう。

可笑しくば神様つてえのを笑いねえ。考えの無え筈の虫でも考える時があるんだ。何を考えたつてお前、己ら手合いは人間様の様に智慧がありあまんじや無えから、けちな事にも頭を痛めるんだ。話がよ、何うしてくれようと思つたんだ。娘の奴をイフヒムの前に突つ放して、勝手にしろと云つてくれようか。それともカチヤを餌に、人間の食うものも食わ無えで溜めた黄色い奴を、思うざま剥奪ひったくつてくれようか。虫つけらは何処までも虫つけらで押し通して、人間の鼻をあかさして見てえし、先刻も云つた通り、親つてえものは意気地が無え、娘丈けは人間竝みにして見てえと思うんだ。

おい、「空の空なるかな総て空なり」つて諺があるだろう。旨めえ事を云いやがったも

んだ。己れや其の晩妙に瞼が合わ無えで、頭ばかりがんとほてって来るんだ。何の事は無え暗闇と睨めつくらをしながら、窓の向うを見て居ると、不図星が一つ見え出しやがった。それが又馬鹿に気になつて見詰めて居ると、段々西に廻つてとうとう見えなくなつたんで、思わず溜息つてものが出たのも其の晩だ。いまいまいと思つたのよ。

そうしたあんばいでもじもじする中に暁方近くなる。夢も見た事の無え己れにや、一晚中ぼかんと眼球をむいて居る苦しみつたら無えや。何うしてくれようと思案の果てに、御方便なもんで、思い出したのが今云つた諺だ。「空の空なるかな総て空なり」「空なるかな」が甘めえ。

神符でも利いた様に胸が透いたんで、ぐっすり寝込んで仕舞つた。

おい、もう少し其方そっちい寄んねえ、己れやまるで日向に出ちやつた。

其の翌日嘯とカチャとを眼の前に置いて、己れや云つて聞かしたんだ。「空の空なるかな総て空なり」つて事があるだろう、解つたら今日から會計の野郎の妾になれ。イフヒムの方は己れが引き受けた。イフヒムが何うなるもんか、それよりも人間に食い込んで行け。食い込んで思うさま甘めえ御馳走にありつくんだ。そうだろう、早い話がそうじゃ無えか。

処がお前、カチャの奴は鼻の先きで笑つてけつからあ。一体がお前此の話つてものは、カチャが首おやいし石になつて持出したものなんだ。彼奴と来ちや全く二まわりも三まわりも己の上手だ。

お前は見無えか知ら無えが、一と眼見ろ、カチャつて奴はそう行く筈の女なんだ。厚い胸で、大きな腰で、腕つたら斯うだ。

と云いながら彼は、両手の食指と拇指とを繋ぎ合わせて大きな輪を作つて見せた。

面相だつてお前、己れつちの娘だ。お姫様の様なのは出来る筈は無えが、胆が太てえんだからあの大でかかい眼で見据えて見ねえ、男の心はびりびりつと震え込んで一たまりも無えに極まつて居らあ。そりや彼奴だつてイフヒムに氣の無え訳じゃ無えんだが、其処が阿魔だ。矢張り老耄の生れ代りなんだ。当世向きに出来て居やあがる。

そんな訳で話も何も他愛なく纏まつちやつて、己れのこね上げた腸詰はグリゴリー・ペトニコフの皿の上に乗つかつたのよ。

それ迄はいい、それ迄は難は無えんだが、それから三日許り経つと、イフヒムの野郎が颯つむじ風の様に駆け込で来やがつた。

「イフヒムの野郎」と云つた時、ヤコフ・イリイツチは再び胴の間を見返つた。話はず

んで思わず募った癩高な声が、もう一度押しつぶされて最低音になる。気が付いて見ると又日影が移って、彼は半身日の中に坐って居るので、私は黙ったまま座を譲ったが、彼は動こうとはしなかった。船員が食うのであろう、馬鈴薯と塩肉とをバタで揚げる香いが、蒸暑く二人に逼った。

海は依然として、ちやぶりちやぶりと階律リスムを合せて居る。ヤコフ・イリイツチはもう一度イフヒムを振り返って見ながら、押しつぶした儘の声で、

見ろい、あの切目の長げえ眼をぎろつとむいて、其奴が血走って、からつきし狂人見えてだつた。筋が吊ったか舌も廻ら無え、「何んだってカチャを出した」と固唾をのみながらぬかしやがる。

「出したいから出した迄だ、別に所以いわくのある筈は無え。親が己れの阿魔を、救主に奉ろうが、ユダに嫁にやろうが、お前つちの世話には相成ら無え。些度物には理解わかりを附けねえ。当世は金のある所に玉がよるんだ。それが当世つて云うんだ。篋棒奴、娘が可愛ければこそ、己れだつてこんな仕儀はする。あれ程の容きりよう色にべらべらしたものでも着せて見たいが親の人情だ。誠カチャを女房にしたけりや、金の耳を揃えて買いに来う。それが出来ざあ腕っこきでグリゴリー・ペトニコフから取り返しねえ。カチャだつて呼吸もすりや飯も

喰う、ぼかんと遊ばしちやおかれ無えんだから……お前つちや一体何んだって、そんな太腐れた眼付きをして居やあがるんだ」

とほざいてくれると、イフヒムの野郎じつと考えて居やがったけが、

と語を切つてヤコフ・イリイツチは雙手で身を浮かしながら、先刻私が譲った座に移つて、ひたひたと自分に近づいた。乾きかけたオヴァオールから酸っぱい汗の臭いが蒸れ立つて何とも云えぬ。

云うにや、

と更に声を低くした時、私は云うに云われぬ一種の恐ろしい期待を胸に感じて心を騒がさずには居られなかつた。

ヤコフ・イリイツチは更めて周囲を見廻わして、

気の早い野郎だ……宜いか、是れからが話だよ、……イフヒムの云うにや其の人間つて獣にしみじみ愛想が尽きたと云うんだ。人間つて奴は何んの事は無え、贅沢三昧をして生れて来やがつて、不足の云い様は無い筈なのに、物好きにも事を欠いて、虫手合いの内懷まで手を入れやがる。何が面白くつて今日今日を暮して居るんだ。虫つて云われ居ながら、それでも偶にや氣儘な夢でも見ればこそじゃ無えか……畜生。

ヤコフ・イリイツチはイフヒムの言った事を繰返して居るのか、己れの感慨を漏らすのか解らぬ程、熱烈な調子になって居た。

畜生。其奴を野郎見付ければひつたくり、見付ければひつたくりして、空手に置いて、搾り榮がしなくなると、靴の先へかけて星の世界へでも蹴つ飛ばそうと云うんだ。慾にかかつてそんな事が見えなくなつたかつて泣きやがった……馬鹿。

馬鹿。己れを幾歳だと思つて居やがるんだ。虫つけらの眼から贅沢水を流す様な事をして居やがって、憚りながら口幅つてえ事が云える義理かい。イフヒムの奴も太腐れて居やがる癖に、胸三寸と来ちやからつきし乳臭うぶなんだ。

だが彼奴の一念と来ちや油断がなら無え。

宜いか。

又肩からもたれかかる様にすり寄つて、食指で私の膝を念入に押しながら、宜いか、今日で此の船の鏽落しも全然すっかり済む。

斯う云つて彼は私の耳へ口を寄せた。

全然済むんでグリゴリー・ペトニコフの野郎が検分に船に来やがるだろう。

イフヒムの奴、黙つちや居無え筈だ。

私は「黙つちや居ねえ」と云う簡単な言葉が、何を言い顯わして居るかを、直ぐ見て取る事が出来た。余りの不意に思わず氣息を引くと、迸る様に鋭く動悸が心臓を衝くのを感じた。而してそわそわしながら、ヤコフ・イリイツチの方を向くと、彼の眼は巖の様な堅い輪廓の睫の中から、ぎらつと私を見据えて居た。思わず視線をすべらして下を向くと、世の中は依然として夏の光の中に眠った様で、波は相変らずちやぶりちやぶりと長閑な階<sup>リズム</sup>律を刻んで居る。

私は下を向いた儘、心は差迫りながら、それで居て閑々として、波の階律に比べて私の動悸が何の位早く打つかを算えて居た。而してヤコフ・イリイツチが更に語を次いだのは、三十秒にも足らぬ短い間であつたが、それが恐ろしい様な、待ち遠しい様な長さであつた。私は波を見つめて居る。ヤコフ・イリイツチの豹の様な大きな眼睛は、私の眼から耳にかけたあたりを揉み込む様に見据えて居るのを私はまざまざと感じて、云うべからざる不快を覚えた。

ヤコフ・イリイツチは齒を喰いしはる様にして、

お前も連帯であげられ無えとも限ら無えが、「知ら無え知ら無え」で通すんだぞ、生じつか……

此の時ぴーと耳を劈く様な響きが遠くで起った。其の方を向くと船渠ドックの黒い細い煙突の一つから斜にそれた青空をくつきりと染め抜いて、真白く一団の蒸気が漂うて居る。ある限りの煉瓦の煙突からは真黒い煙がむくむくと立ち上つて、むっとする様な暑さを覚えしめる。労働を強うるために、鉄と蒸気とが下す命令である。私は此の叫びを聞いて起き上ろうとすると、

待て。

とヤコフ・イリイツチが睨み据えた。

きよろきよろするな。

宜いか、生じつか何んとか云つて見ろ、生命は無えから。

長げえ身の上話もこのためにしたんだ。

と云いながら、彼は始めて私から視線を外ずして、やおら立ち上つた。胴の間には既に眼を覚したものが二三人居る。

起きろ野郎共、汽笛が鳴つてらい。さ、今日ですつかり片付けて仕舞うんだ。

而して大欠伸をしながら、彼は寝乱れた労働者の間を縫って、オデッサ丸の船階子を上って行った。

私も持場について午後の労働を始めた。最も頭脳を用うる余地のない、而して最も肉体を苦しめる労働はかんかん虫のする労働である。小さなカンテラ一つと、形の色々の金槌二つ三つとを持って、船の二重底に這い込み、石炭がすでに真黒になって、油の様にとろりと腐敗したままに溜って居る塩水の中に、身体を半分浸しながら、かんかんと鉄鏽を敲き落すのである。隣近所でおろす槌の響は、狭い空洞うつつろの中に籠り切って、丁度鳴りはたいて居る大鐘に頭を突つ込んだ通りだ。而して暑さに蒸れ切った空気と、夜よりも暗い暗闇とは、物恐ろしい仮睡に総ての人を誘うのである。敲いて居る中に気が遠くなって、頭と胴とが切り放された様に、頭は頭だけ、手は手だけで、勝手な働きをかすかに続けながら、悪い夢にでもうなされた様な重い心になって居るかと思うと、突然暗黒な物凄い空間の中に眼が覚める。周囲からは鼓膜でも破り相な勢で鉄と鉄とが相打つ音が逼る。動悸が手に取る如く感ぜられて、呼吸は今絶えるかとはばかりに苦しい。喘いでも喘いでも、鼻に這入って来るのは窒素ばかりかと思われる汚い空気である。私は其の午後もそんな境涯に居た。然し私は其の日に限って其の境涯を格別気にしなかった。今日一日で仕事は打切りになると云う事も、一つの大なる期待ではあったが、馳て現われ来るべき大事件は若い好奇心と敵愾心とを極端に煽り立てて、私は勇士を乗せて戦場に駆け出そうとする牡馬の様

に、暗闇の中で眼を輝かした。

とうとう仕事は終わった。其の日は三時半で一統に仕事をやめ、其処此処と残したところに手を入れて、偕て会社から検査員の来るのを待つ計りになった。私はかの二重底から数多の仲間と甲板に這い出して、油照りに横から照りつける午後の日を船橋の影によけながら、古ペンキや赤錆でにちやにちやと油ぎって汚れた金槌を拭いにかかった。而して拭いながらいつかヤコフ・イリイツチが「法律つてもものは人間に都合よく出来て居やがるんだ。シャンパンを飲み過ぎちやなら無えとか、靴下を二十足の上持ちちやなら無えとかそんな法律は薬にし度くも無え。はきだめを覗いちやなら無えとか、落ちたものを拾っちゃなら無えとか云うんなら、数え切れ無え程あるんだ。そんな片手落ちな成敗にへえへえと云って居られるかい。人間が法律を作れりやあ、虫だつて作れる筈だ」と云つたのを想い出して、虫の法律的制裁が今日こそ公然と行われるんだと思つた。

丁度四時半頃でもあつたらう、小蒸汽の汽笛が遠くで鳴るのを聞いた。間違なくセミオン会社所有の小蒸汽の汽笛だ。「来たな」と思うと胸は穏かでない。船階子の上り口には労働者が十四五人群がつて船の着くのを見守つて居た。

私の好奇心は我慢し切れぬ程高まつて、商売道具の掃除をして居られなくなった。一つ

見物してやろうと思つて立ち上ろうとする途端に、

様あ見やがれ。

と云う鋭い声がかの一群から響いたので、私はもう遣つたのかと宙を飛んで、

ワハ……………

と笑つて居る、其の群に近づいて見ると、一同は手に手に重も相な獲物をぶらさげて居た。而して瞬く暇にかんかん虫は総て其の場に馳せ集まつて、「何んだ何んだ」とひしめき返して、始めから居たかんかん虫は誰と誰であるか更に判らなくなつて居る。ナポレオンが手下の騎兵を使う時でも、斯うまでの早業はむずかしろう。

私は手欄から下を覗いて居た。

積荷のないため、思うさま船脚が浮いたので、上甲板は海面から小山の様に高まつて居る。其の甲板にグリゴリー・ペトニコフが足をかけようとした刹那、誰が投げたのか、長方形のクツ鉄が飛んで行つて、其の頭蓋骨を破つたので、迸る血煙と共に、彼は階子を逆落しにもんどりを打つて小蒸汽の錨の下に落ちて、横腹に大負傷をしたのである。薄地セルの華奢な背広を着た太った姿が、血みどろになつて倒れて居るのを、二人の水夫が茫然立つて見て居た。

私の心にはイフヒムが急に拡大して考えられた。どんな大活動が演ぜられるかと待ち設けた私の期待は、背負投げを喰わされた気味であったが、きびきびとした成功が齎らず、身ぶるいのする様な爽かな感じが、私の心を引つ掴んだ。私は此の勢に乗じてイフヒムを先きに立てて、更に何か大きな事でもして見たい気になった。而してイフヒムがどんな態度で居るかと思つて眼を配つたが、何処にまぎれたのか、其の姿は見当らなかつた。

一時間の後に二人の警部が十数人の巡査を連れて来船した。自分等は其の厳しい監視の下に、一人々々凡て危険と目ざされる道具を船に残して、大運搬船に乗り込ませられたのであつた。上げて来る潮で波が大まかにうねりを打つて、船渠の後方に沈みかけた夕陽が、殆ど水平に横顔に照りつける。地平線に近く夕立雲が渦を巻き返して、驟雨の前に鈍つた静かさに、海面は煮つめた様にどろりとなつて居る。ドウニパー河の淡水をしたたか交えたケルソンでも海は海だ。風はなくとも夕されば何処からともなく潮の香が来て、湿つぽく人を包む。蚊柱の声の様に聞こえて来るケルソン市の薄暮のささやきと、大運搬船を引く小蒸汽の刻をきざむ様な響とが、私の胸の落ちつかないせわしい心地としつくり調子を合わせた。

私は立つた儘大運搬船の上を見廻して見た。

寂然ひっそりして溢れる計り坐つたり立つたりして居るのが皆んなかんかん虫の手合いである。

其の間に白帽白衣の警官が立ち交つて、戒め顔に佩劔を撫で廻して居る。舳に眼をやるとイフヒムが居た。とぐろを巻いた大繩の上に腰を下して、両手を後方で組み合せて、頭をよせかけたまま眠つて居るらしい。ヤコフ・イリイチはと見ると一人おいた私の隣りに大きく胡坐をかいてくわえ煙管をぱくぱくやつて居た。

へん、大袈裟な真似をしやがつて、

と云う声でしたので、見ると大黒帽の上から三角布で頬被りをした男が、不平相にあたりを見廻して居たが、一人の巡査が彼を見おろして居るのに気が附くと、しげしげそれを見返して、唾でも吐き出す様に、

畜生。

と云つて、穢らわし相に下を向いて仕舞つた。

(一九〇六年於米国華盛頓府、一九一〇年十月「白樺」)



# 青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学大系 序」三一書房

1955（昭和30）年3月31日初版発行

1961（昭和36）年6月20日第2刷発行（入力）

1968（昭和43）年12月5日第3刷発行（校正）

※ファイル中の「乗」と「乘」の混在は、底本通りにしました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：Nana ohbe

校正：小林繁雄

2003年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かんかん虫

有島武郎

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>